

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-12

嵐山カントリークラブの話がひと区切りつこうとしたところで飲み物が運ばれてきた。「うん。信州のバーテンダーも侮れない」とロブ・ロイを飲んだ辰巳はうっかり呟いた。「昨夜の余韻を楽しんでいるようですね」とすぐに察した真紀はわざとらしく言った。「いやいや、まいったなあ」

「折り入って相談したいことがあるとおっしゃいましたが？」と真紀はカクテルグラスを持ったまま訊いた。

真紀には口ごもっている辰巳を見ているだけで、麻里子への本気度が伝わってきた。「ステインガーとやらを飲んでみたい」と辰巳は唐突に言って、ウェ이터を呼んだ。「ロブ・ロイをロックでお願いします」と遊び心をくすぐられた真紀は、辰巳の注文を聞き終えたウェ이터に頼んだ。

「同じカクテルをお作りして、それぞれを取り替えてお出しすればよろしいですね？」とウェ이터は両手を交差させてみせると注文を確認した。

「あなたはからかい上手だね」と辰巳はウェ이터が行ってしまうと半笑いで言った。「で、お話になりたいこととは？」と真紀はそれには反応しないで真顔に戻って訊いた。「……いくら考えても説明のしようがない何かで惹かれ合ってしまったんだ。こんな気持ちになったのはじめてだし、無責任だと取られてもしかたがないが、この先、どうなっていくかもわからない……」と辰巳は遠くを見つめる視線を真紀に向けて、心に思うままを口にした。

「昨日の夜に麻里子さんから電話がありました。辰巳さんがお風呂に入っている時です。当然ながら表情はうかがえませんが、いじらしいくらい、淡々と話されていました。自分の耳を疑うほどあからさまにです」

「そうだったのか……」と辰巳は言って、納得したように頷いた。

「その後は連絡もこないの、やきもきしていたら、辰巳さんからの電話でした」

「これから先、何があろうと彼女を大切にしようと思っている」

「あのポビーフィッシャー（チェスの天才）ですら、30歳年下のハンガリー人少女チェスプレイヤーへ熱烈で稚拙な恋文を書いているのですから。自信を持ってください」

「でも、結局のところ振られたんだ。わたしは天才じゃないから、無茶はしませんよ」

「好いた惚れたはお二人が決めるものです。ところで、お仕事の方の運び具合は順調のようですね」

辰巳の本音を聞くことができ一安心した真紀は、話を切り替えた。「うん。予想以上に手ごたえを感じている。今後は商品化までの段取りを緻密に計画してやらなければならない。必ず成功させるよ」

実業家本来の姿を取り戻した辰巳は、自信ありげに太い声で言った。